



昨日 5月15日(日)は、『ペンテコステ』(聖霊降臨日)という、教会の働きの始まり、言わば『教会の誕生日』をお祝いする礼拝が、世界中のキリストで、行われました。神の子イエス・キリストは、33年間 人としての生涯を送り、当時の人々によって十字架につけられて、人として死なれた後 それから3日目の朝に よみがえられました。その日を記念した日曜日が『イースター(復活祭)』です。イエスさまは、確かに復活された証として 十字架上で打ち付けられた際の 手の平や足に残っている大きな釘跡 脇腹に刺された槍の跡を そのままに、復活の日の朝から10日の間、人々の目に見える形であちこちに現れました。その自らの姿を通して、神様の存在と その愛を明らかにされ、復活の主に出会った人たちはそれぞれに喜びと力を与えられ、再びイエスさまと共に生きられる希望と感謝に満たされていました。ところが、その直後 イエスさまは

愛する弟子達を集められると、『わたしは世の終わりまで いつも あなたがたと共にいます。』との約束を残し、彼らの目の前で 真の父である天の神様のもとへ昇って行かれました。(これを 昇天日といひます。)この時、イエスさまは「私が天へ帰った後には、私の代わりに“助け主”が来てくれます。あなたがたの目には見えないけれど、その助け主は それぞれの心に注がれて 生きて働く力を与えてくれます。」という約束をしてくださいました。この時に 言われた“人の心の中に生きて働く神様の力”が『聖霊』です。これはすなわち、「すべての創造主である 天の神様」、「そのひとり子である イエスさま」、そして、この「聖霊」の3つは、それぞれに かたちは異なっていますが、その“基”は みな 同じ「神」であるという意味から『三位一体』と表現します。(今 私たちが耳にするこの言葉の語源は ここから由来するものです)今度こそ ほんとうに イエスさまを失ってしまったと、悲しみと不安で打ちひしがれていた人々でしたが、やがて この 聖霊を与えられる瞬間が 間もなく訪れるのでした。それは、大好きな師であるイエスさまが弟子たちの目の前で 天国へ帰られた『昇天日』の10日後、復活から数えて50日が経った日のことです。喪失感と絶望感で 途方に暮れた日々を 無気力に過ごしていた彼らの身に 突然 起こったその時の様子が新約聖書の中の『使徒の働き(2章1-4節)』には、次のように 詳しく記されています。

『五旬節の日になって、みなが一つの所に集まっていた。すると突然、天から激しい風が吹いてくるような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また 炎のような分かれた舌が現われて 一人一人の上にとどまった。すると みなか聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国の言葉で話し出した。』

受胎告知。処女降誕。復活。昇天などと同様に、この出来事もまた、人間には 決してあり得ないこと、あまりに不可思議で信じ難いことでしたが、遭遇した弟子達の心には 衝撃的な変化が起こったのでした。それまでは まるで抜け殻だった姿は 別人のように 力が 漲り、明るく輝き始め、神さまへの信仰を大胆に語り始めると、互いに祈り合い、励まし合う仲間同士へと 一転しました。神様の力(聖霊)が、どんな時も常に 生きて働いてくださり、弟子達の心を励ましてくれました。それにより、ずっと共にいて愛し導いてくださった 復活の主イエス・キリストを、想うことが出来ました。そして 皆は それから、一つの所に住み、すべてのものを共有し、分かち合い、神さまを賛美し、聖書の御言葉を語り合い、人々のために祈りました。まさに それは イエスさまの 今までの働き、生き方でした。力ある伝道は エルサレムに留まることなく、近隣の国々の大勢の人々にまで 語り伝えられました。

この時の 聖霊による弟子達の働きがあったからこそ、私達日本人を始め、世界の国々の人々は皆、今 現在こうして 聖書を手に出来ているのだということを 実感し、神様の 永遠の愛と 深い恵みを 想わされます。

つのぶえ保育園でも、このペンテコステの出来事に心を馳せ、先週13日(金)に お隣の成田教会に伺い、教会員の方々と共に礼拝を守りました。子どもも大人も 共に 心を合わせ 祈りを捧げ『教会の誕生日』を嬉しく お祝いできましたことに、2000年以上も昔、弟子達に現わされた聖霊が 今を生きる 私達にも変わらず注ぎ続けてくださる 神様の豊かな祝福を 心から感謝いたします。(石田 記)